KALUMA

ドラ焼き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＫＡＬＵＭＡ

【Ｎコード】
Ｎ８８７５Ｋ

【作者名】
ドラ焼き

【あらすじ】
北の国シアロのとある小さな村、ノリリスクというところに一人の男の子が産まれます。しかし、その村は盗賊団クロノスに襲われ、滅ぼされてしまいます。男の子はクロノスのリーダー、ゼウスという大男に連れ去られてしまい・・・この小説は、その男の子のその後のストーリーです。

駆け出しなのでよければアドバイスをお願いしますｍ（　　）ｍ

始まり

ノリリスクという村に、また新しい命が生まれた。木々には緑が所々に見えたが、夜はまだ少し肌寒かった。出産を終えた小さな家の中では産声が響いている。しかし、その出産は祝福されることはなく、村からは黒い煙があがっていた。窓の外では武器を持った男たちが無防備のままの村人を虐殺していた。村人の中には武器を持って抵抗している者もいたが、抵抗も虚しく数十人の男たちに囲まれ惨たらしく殺されてしまった。そして、出産を終えたこの家にも魔の手はおよんだ。

小さな家の中に、大男が立っていた。大男の腕の中には小さな赤ん坊がすやすやと眠っており、大男はその寝顔を眺めていた。しばらく眺めていると、赤ん坊はパッと目を覚ました。
大男と赤ん坊の目が合う。大男は赤ん坊を睨み付けた。しかし赤ん坊は怖がることもなく、逆に大男を睨み付けているようにもみえた。
大男は心底驚いたような顔をし、また赤ん坊を眺め始めた。
そこに一人の男が扉を開けて入ってきた。男は赤ん坊を抱いている大男を見て言った。
「その赤ん坊がどうかしたんですかい？ゼウスさん」
「こいつは俺が育てる」
ゼウスと呼ばれた大男は即答した。

一瞬男はキョトンとし、慌てて聞き返した。
「ゼウスさんがその赤ん坊を育てるんですかい！？」
「あぁ、俺が育てる」
きっぱりとゼウスは言い切った。
「その赤ん坊を育ててゼウスさんの何の得になるんです！？」

男が聞く。しかしゼウスにはもう男の声など届いてなく、自分の世界に入り込んでおり、
「こいつは絶対に俺が探してきたような奴になるに違いない」
などと、ぼやいていた。男はとうとうあきれて家の二階へと金目のものを探しにいった。

そして男たちは大体のことを済ますと、「クロノス」と書かれた旗を鉄パイプにつけ地面に突き刺し、列をなして村から出ていった。

男たちのアジトはノリリスクから南西に数十キロ離れたところの森林地帯にある。アジト付近の木々は全て切られ、根っこまできれいになくなっている。その切った木々を利用し、その土地にはログハウスのような家が横一列に建てられていた。そこに、疲れきった男たちが列をなして帰ってきた。
列の先頭を歩くゼウスという大男の腕の中には、すやすやと眠る赤ん坊がいた。ゼウスは赤ん坊に話しかける。
「お前はたいしたやつだ。俺に睨まれたのに怖がりもせず泣き叫びもせず、逆に睨み返してきた！俺に睨まれれば大の大人も俺の前に膝まづくものだ。お前は本当にたいしたやつだ！」
ゼウスは赤ん坊が寝ているにも関わらず、大声で赤ん坊に話しかけた。そしてあまりの声の大きさに赤ん坊は起きてしまった。しかし泣きだすことはなく、ただゼウスを睨み付けていた。

取引

あれから１０年後・・・

一人の少年がハンドガンを構え、狙いを絞っていた。少年の体躯は細く、身長は低い。顔は精悍な顔つきをしており、やや目付きが悪かった。狙う先には一頭の小鹿がおり、少年を警戒するように見ていた。そして少年は引き金をひく。すると破裂音が響き、銃弾は風をきりながら小鹿に向かって飛んでいき、見事小鹿の頭を貫いた。ハンドガンからは空薬莢が弾き出され、次弾をくわえ込む音が聞こえた。すると少年は、銃を右の太股に吊ってあるホルスターに戻し、すぐさま死んだ小鹿へ向かって走りだし、その小鹿の足を引っ張りどこかへ走り去っていった。

少年が向かった先は、森の中のひらけた土地にある横一列に並んだ家々の、ちょうど真ん中の家だった。少年は扉の前でとまると、扉を2回叩いた。すると中から「入れ」と一言聞こえたので、少年は扉のノブをまわし、死んだ小鹿を引っ張りながら家の中へと入っていった。

家の中は広く、綺麗な絨毯が引かれ、部屋の真ん中には大男がソファーに座っていた。大男の向かい側にもソファーがあり、大男はそこに座れと手招きした。少年はそれに従い、死んだ小鹿引っ張りながらソファーまで歩き、死んだ小鹿を自分の足下に置いてソファーに座った。ソファーは少年が座っても体が沈むほど柔らかかった。大男は少年の顔を眺め、その次に少年が狩ってきた小鹿をまじまじと眺めた。そしてまた顔を少年に向け言った。

「なかなかお前も腕が上がったなカルマ」

カルマと呼ばれた少年は無表情のままうなずいた。大男は一瞬考えるように腕を組み、そのままカルマに言った。

「お前にもそろそろ本格的に仕事をしてもらおう。雑用はもう飽き

ただろぅ？」
カルマは言い返した。
「本格的な仕事ってなに？」
「もちろん俺たち盗賊の仕事、村を襲って金目のものや売れそうな女を盗むことさ」
大男は軽い口調で言った。カルマは少し考え、そして、
「僕も金目のものや売れそうな女を盗むの？」
と、聞いた。大男はくびをかるくふった。
「いや、今回はある村の腕輪の形をした秘宝だけを盗み出してもらう」
「いつやるの？」
「明日だ」
「絶対やらなきゃいけないの？」
「お前がやりたくないのならまだやらなくてもいい、だがやるのだったらご褒美をやろう」
大男はてきぱきと話した。そしてカルマは自分が殺した小鹿をじっと見て、少し考えた後、
「じゃあその仕事をやるかわりにこの小鹿の一番美味しい部分を僕にちょうだい」
と、小鹿を見ながら言った。大男は一瞬きょとんとし、そして大声で笑らいだした。がさつで大きな笑い声は家の中にとどまらず、外にまで響いた。そしてもちろんカルマの鼓膜も大いに揺らし、カルマはすぐさま耳をふさいだ。そして大男は気のすむまで笑い、そしてカルマに耳をふさぐのをやめるよう指示し、言った。
「その程度ならいくらでもくれてやるわ。いつも余った不味い部分を食ってるお前に一番うまい部分をたんまりやろう。だが、この仕事が成功したらの話だがな」
大男はにやりと笑いカルマの顔を見た。カルマは無表情のまま頷いた。

仕事

松明を持った少年が一人、夜の森の中を歩いていた。森の木々は松明の火によって赤く照らされ、より不気味さを増していた。そんなことはお構い無しに少年は、生い茂った雑草を踏み倒しながら歩いていく。すると少し先に森の終わりが見えた。少年は少し早足になり森を抜ける。すると視界がひらけ、遠くに村の囲いが見えた。少年はしゃがんで松明の火を消し地面に捨て、目を細めて村の門を眺めた。空には満月が転々と輝いており、目が慣れると遠くまで見えた。村の門には見張りが一人おり、

「一人だけか」

と、少年は独り言をつぶやいた。

そして少年は姿勢を低くし、足音を消して見張りから見えない角度で村の囲いまで走った。囲いにつくと少年はハンドガンを右の太股に吊ってあるホルスターから取りだし、ハンドガンの先にサイレンサー（消音器・発砲音を減少させる装置）を取り付け、門へと近づいた。門の前には２０代くらいの男が立っていた。男の顔はまだどこか幼さが残っており、眠そうにあくびをかいていた。少年は静かに銃の安全装置を外し、銃を右手で構えながら男に接近する。そして男の真横まで近寄ると、男の頭に銃を突き付け言った。

「動くな」

男は自分の頭に銃が突き付けられているのを見て激しく動揺し、持っていた槍を地面に捨て両手を挙げた。少年は続ける。

「村の秘宝はどこにある？」

「ひ、秘宝ってシアロ王の腕輪のことか！？」「そうだ。どこにある？」

「い、一番奥にあるでかい家の中の金庫だ！た、頼む殺さないでくれ」

「その家のどこに金庫があるかわかるか？」

「あ、あの家は三階建てで確かにきゃっ二階の寝室に金庫があるって話を聞いたことがある！頼むよ殺さないでくれ！なんでもすー」
それを聞くと少年は引き金を絞った。破裂音はサイレンサーによって消され、代わりにパシュッという鈍い音だけが鳴った。男の頭には銃弾が突き刺さり、血が吹き出した。男は一瞬のうちに息絶えそのまま仰向けに倒れた。少年はすぐさま死んだ男の足をもって引きずり、闇の中へと隠した。そして少年は村の門を少しだけ開け、開いた隙間に頭をいれて村の中を覗きこんだ。そして村人が外にいないことを確認し、扉を開けて素早く村の中へと侵入した。
村の形はほぼ正方形で、規則的に間隔が空いて家々が並んでいる。家の数は約１５棟で、少人数の村であった。村の奥には一棟だけやたら大きい家が見え、少年はすぐさまその家に秘宝があると予想した。
少年は門付近の木に隠れながら村の様子をうかがっていると、一人の男が門から少し離れた家から出てきて、門に向かい歩いてきた。少年は見張りの交代役だと判断し、銃をホルスターに戻し、左の太股に縛ってある革でできた鞘からナイフを左手で抜いた。ホルスターには穴が空いており、サイレンサーをつけても銃を入れられるようになっていた。そして少年は木の後ろで身構える。男の足音はだんだん近づいてきて、そして門の前で止まった。その瞬間、少年は木の影から男に向かって走り出した。男が少年の足音に気付き、振り向いた瞬間に少年はナイフで男の心臓を貫いた。男は鈍い悲鳴を小さく漏らし、膝から崩れ落ちうつ伏せに倒れた。少年は男の右手首を両手でもって引きずり木の影に隠すと、男を仰向けにし、胸からナイフを一気に抜いた。ナイフを抜くと血が吹き出し、赤く染まった刃を少年は木の葉っぱで拭い革の鞘に戻した。
そして少年は意を決し、村の囲いに沿って三階建ての家まで足音をたてないよう走り抜けた。
三階建ての家にまでつくと、腰の後ろに紐でまきつけていたバッグからガムテープのようなものを取りだし、入り口の左にある窓の鍵

付近のガラスに張り付け銃のグリップの部分で静かに張り付けたところだけを砕いた。そしてテープを剥がし窓ガラスに空いた穴に手を入れ、窓の鍵を開ける。そして窓を静かに開け、家の中へと静かに侵入した。

家の中は月明かりで照らされており薄暗かった。少年が入った場所は広い玄関ですぐ右手に入り口の扉が見え、その奥にはリビングと思われる部屋の扉が見え、正面には何かの部屋の入り口がありその上にはL字階段がかかっていた。少年は銃を構えながら足音をださないよう歩いていき、見張りから聞き出した情報通りリビングと思われる扉付近の階段ののぼり口から二階へとのぼっていった。階段をのぼり終えると、少年の正面には一つ、その左に二つ、三つと扉が並んでいた。

先ず少年は一つ目の扉をゆっくりと開けた。部屋の奥にはシングルベッドが一つあり、そこから子供の小さな寝息が聞こえた　。少年はゆっくり部屋を見渡すが、金庫と思われるものはなかったのでその部屋を出た。

次に一つ左の扉をゆっくりと開けた。部屋の奥にはダブルベットがあり、ダブルベットからは荒い寝息と小さな寝息が聞こえた。そして部屋の右端には、高級そうな台があり、その上には鍵穴式の金庫が置かれていた。少年は先ずホルスターから銃を取りだし、ダブルベットに寝ている二人の頭を撃った。するとたちまちベッドは赤く染まり、シーツからは血がぽたぽたと床に垂れた。少年は床に落ちた空薬莢を拾いバッグへ入れ、そしてバッグからピッキングに使う針金のようなものを2本取りだし、金庫の鍵穴に差し込んだ。何度か金属が擦れ合う音がなると、カチャッという歯切れのよい音が聞こえた。そして金庫の扉が開くと、中には宝石などで綺麗に装飾された腕輪が入っていた。少年はその腕輪をがさつにバッグへと押し込み、すぐさま階段を下り玄関の開いた窓から外に出た。そして来たときと同じように村の囲いに沿って足音をたてないよう走り抜け

た。
門までつくと、門の扉をそっと開けて暗い森の中へと全力で走っていった。
少年は森の中に入ってしばらく歩くと、バッグから手探りで松明とマッチを取りだし、マッチで新しい松明に火をつける。すると、少年の視界は一気に赤く照らされ、それに慣れるまでに少し時間がかかった。目が慣れると、次にコンパスを取りだし方角を調べた。
そして少年は、少し休もうと地面にあぐらをかいて座り、松明を自分の右横に置いてバックを腰から取り目の前に置いた。そして少年は置いたバックの中から水筒を取りだし、水筒の蓋に水を注いで何杯か飲み一息ついた。松明の火によって照らされた少年の顔には汗が滲み出ており、何度も頬を伝って地面へと落ちていった。
そして少年は、汗を右腕で拭って水筒をバックにしまい、バックを後ろ腰に紐で巻きつけながら立ち上がり、
「鹿の一番美味しいところって、どんな味がするんだろなぁ」
などとぼやきながら北東に向かってまた、歩みを進めていった。

褒美

日が昇始め、まだ肌寒い頃に一人の少年が、ある家の扉を2回叩いた。すると中から「入れ」と一言聞こえたので、少年は扉を開けて家の中へと入っていった。その家は、森の中の拓けた土地に、横一列に並んだログハウスのような家々のちょうど真ん中に建っている家だった。

少年が家の中に入ると、ソファーに座っている大男がいた。大男が座っているソファーの向かい側にもソファーがあり、それに座るよう大男が少年に手招きした。少年はそれに従い、ゆっくりとソファーまで歩いていき、体を重力に任せ、倒れるようにソファーに座った。少年の表情はあからさま疲れきっていた。大男は少年の顔をまじまじと見た後、

「盗ってきたか？」

と聞いた。少年は後ろ腰に縛っていたバックをとり、膝に置いて、その中から腕輪を取り出した。それを大男は受けとり、掌にのせてまじまじと見た。

「本物だな」

と、大男はつぶやき奥の部屋へと腕輪をもって消えていった。少年は何度か睡魔に襲われ寝そうになりながらも、大男が戻って来るまで必死に耐えた。すると、奥の部屋から何かが焼ける香ばしい香りがして、少年は昨日の晩から水以外何も口にしていないのを思いだし、突如空腹に襲われ睡魔はどこかに消えていった。そして、奥の部屋から大男が左手に何かが入った皿とナイフとフォークをもち、右手に小さなテーブルをもって現れた。そして少年の前に小さなテーブルを置き、その上に香ばしく焼けた肉の入った皿を置き、ナイフとフォークを手渡した。

「それがご褒美の肉だ、食え」

大男がそう言うと、待ってましたと言わんばかりに少年はナイフで肉を切り、次々と口へはこんだ。肉を無我夢中で食べている少年を横目に、大男は酒の大瓶をラッパ飲みしていた。
少年が肉を食べ終わると、大男は残り少なくなった酒を一気に飲み干し、少年に聞いた。
「一番うまい部分はどんな味だった？」
少年は少し考え、
「わかんない。・・でも、おいしかった。」
と、答えた。大男は、少年の顔を見て少し微笑み、
「俺はもう寝る。お前も寝ろ」と言い、大男は二階の寝室へと歩いていった。少年は余韻に浸った後、大男の家から出ていき、一番右端の家へと歩いていった。

それぞれ1つの家には5人の男たちが住んでおり、少年が住んでいる家は少年を含め6人と他より人数が多く、個人部屋は5部屋しかないので少年の部屋には2人住んでいる。正確に言えばもともと1人しかいなかった部屋に後から少年が入ってきたので、正確には少年の部屋ではない。

家の中に入ると、少年は二階へと続く階段をのぼっていき、5つある扉のうち一番左角の扉を開けた。部屋の中は7畳くらいの大きさで、普通のベッドと小さなベッドが2つ並んで置いてあり、クローゼットと収納が2つずつ置いてあるだけのシンプルな部屋だった。窓は入って正面の壁に1つだけで、小さかった。
少年は小さいベッドのほうに寝っころがり、天井を眺めていた。すると、隣のベッドに寝ていた男が少年に気付き、
「お帰りおちびちゃん」
と言った。少年は少しむっとした顔をし、
「ルイス、僕はおちびちゃんじゃない、カルマだ。」
と言い返した。

「そんなことはどうでもいいけどさ、初仕事はうまくいったのか？」
ルイスと呼ばれた男はカルマに聞いた。
「うまくいったよ」
ルイスは少し真面目な表情になり、
「何人殺した？」
と、聞いた。カルマは天井を眺めながら、
「４人」と答えた。
「そうか・・・」
「でも」
「でも？」
「ルイスが僕に言ってたようなことは何も感じなかったよ」
「・・・」
沈黙が流れた。
そしてルイスはまた聞いた。
「本当にお前は何も感じなかったのか？」
しかし返事返ってこない。
「カルマ？・・寝ちゃったのか」

カルマはすやすやと寝息をたて、熟睡していた。
ルイスは、カルマに自分の毛布をかけてやり、しばらく寝顔を眺め、
「ゆっくり休め」
と一言言い残して部屋から出ていった。
太陽はすでに空の上で大地をやさしく照らしていた。

小さな約束

太陽が沈みかけていた頃にカルマは目を覚ました。
窓の外では、夕日によって赤く照らされた木々の枝葉が、微風によって小さく揺れていた。

カルマはベッドから立ち上がり大きく背伸びをすると、自分の部屋をでて階段を下り、家の扉を開けて外に出た。

家の外では、男たちが騒がしく話し合っていた。カルマが気になって男たちが集まっているところへ歩いていくと、集団の後ろのほうにいたルイスがカルマに気付き、
「よく眠れたか？」
と、話しかけてきた。
「よく眠れたよ。ところでこれはなんの騒ぎ？」
「ゼウスさまが南にある大都市クヴァシルの秘宝、シアロ王の大剣を盗みに行くメンバーを決めていたんだが、そのメンバーにお前を指名したんだ」
「僕を？」
カルマは集団の真ん中にいるゼウスを見た。すると、ゼウスとカルマの目が合った。
「カルマ！こっちへ来い！」
ゼウスはそう言ってカルマに手招きをした。
カルマは小走りでゼウスの前まで走っていく。するとゼウスが大声で話し出した。
「お前たちよく聞け！！こいつは1人で秘宝、シアロ王の腕輪を盗んできた！その実力は確かだ！今回襲う街は大規模で、警備もかなり厳しい。しかも大都市だけに、敵にばれてはいけないという足枷もある。こいつは隠密行動にいたってはこの俺よりも優れているだ

ろう」

男たちからはざわめきが起こった。

「ゼウスさまより優れているだと？」

「まだまだガキのあいつが？」

「ありえねぇよ」

所々から否定の声が上がった。

「てめぇら黙れっ！！！」

そのざわめきは、ゼウスの怒声によりおさまった。

「言っておくがな、お前らはもうこいつの足元にも及ばねぇんだよ。まぁルイスには経験の差で負けてるかもしれんがな。」

「そんなことないですよ。俺はもうカルマには何をやってもかないません」

ルイスが苦笑をしながらゼウスに言った。

「あのルイスがかなわない！？」

「嘘だろ！？」

「マジかよ・・・」

「・・・ふぁぁ」

カルマはのんきにあくびをかいていた。

「てめぇら納得したか？」

意義を唱える者はいなかった。

「そんじゃぁ俺とルイスとカルマをいれてあと7人、俺が選ぶ」

メンバーが決まると、メンバーに選ばれた者もそうでない者も、自分たちの部屋へと戻っていった。カルマも同じく自分の部屋へと戻り、銃とナイフの整備をはじめた。

「出発は明日の昼らしい」
ルイスが自分のナイフを研ぎながらカルマに話しかけたてきた。
「ルイスは何人殺したことある？」
突然の質問にルイスは黙った。そして答えた。
「指で数えられないくらい殺したよ」
「そっか」
「俺は確実に地獄いきだろうな」
「・・・」
「まっ、もう後戻りはできないんだ。死ぬまで俺はこういう生き方をするさ」
「ルイス、死なないでね」
「そりゃ無理な話だ。俺だっていつかは寿命がきてだなー」
カルマは不意に、小さな小指をルイスの顔の前に出した。
「ルイス、約束」
「ゆびきりか、懐かしいな。まぁ、俺なりに守ってみるさ」
そしてルイスは自分の小指をカルマの小指と結び、約束をかわした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8875k/

ＫΛＬＵＭΛ

2010年10月10日02時45分発行